

美術館
府中市
183-0001 東京都府中市浅間町1-3
ホールダイヤル 050-5541-18600

KOIDE NARASHIGE: IN PURSUIT OF THE JAPANESE OIL PAINTING FOR THE

新

新しい花に、
強い根を。
小出 栖重
2025 I 2 SAT. 2026 O 3 OI SUN.



休館日 月曜日(12月12日、2月23日は開館、12月29日、1月3日、1月13日、2月24日) 開館時間 午前10時から午後5時(入場は午後4時30分まで)
観覧料 一般800円(640円)、高校・大学生400円(320円)、小・中学生200円(160円)
*(内は20名以上の団体料)
*未就学児は無料*府中市内の小中学生は「府中の子どものバスボーン」で無料*障害者手帳(ライフID)等をお持ちの方と付き添いの方1名は無料*本展覧料でコレクション展もご覧いただけます。
グッズを持てる少年 1923年 東京国立近代美術館



交通案内

京王線東府中駅から
・徒歩17分・ちゅうバス府中駅行き「府中市美術館」①下車すぐ
京王線府中駅から
・ちゅうバス多磨町行き「府中市美術館」①下車すぐ
・武蔵小金井駅南口行き(一本木経由)「天神町幼稚園」②下車すぐ
・武蔵小金井駅南口行き(学園通り経由)「天神町幼稚園」③下車徒歩8分
・国分寺駅南口行き(東八道路経由)「天神町幼稚園」③下車徒歩8分
JR中央線武蔵小金井駅南口からバス
・府中駅行き(一本木経由)「一本木」④下車すぐ
・府中駅行き(学園通り経由)「天神町幼稚園」⑤下車徒歩8分
JR中央線国分寺駅南口からバス
・府中駅行き(東八道路経由)「天神町幼稚園」⑤下車徒歩8分
お車の場合は、美術館近くの府中市臨時駐車場(無料、54台収容)をご利用ください

裸女結髪 1927年 京都国立近代美術館



こいで・ならしげ(1887-1993)
大阪・島之内の老舗の薬屋に生まれる。1907年上京して東京美術学校日本画科に学ぶ。のち西洋画科に転科。卒業後は大阪で制作を続け、1919年「N」の家族で二科展特賞を受賞。1921年から翌年にかけて欧州を旅行。1923年二科会会員となる。1924年鍋井克之、黒田重太郎、国枝金三らと大阪で信濃橋洋画研究所を開設し、関西の洋画界で指導的地位をつとめた。1926年芦屋に転居。若くから病気がちで、自らを「盲人」と呼ぶほどの瘦身であり、裸婦像や静物画などアトリエ内での制作に情熱を向けた。またガラス絵や挿絵装幀、随筆など多彩な活動をみせた。1931年43歳で病没。

関連イベント
展覧会講座
「小出栖重がめざした、新しき油絵」
小林真結(当館学芸員)
2月8日(日)午後2時 当館講座室 無料
20分スライドレクチャー
12月20日(土)、1月17日(土)、2月14日(土)
いずれも午後2時 当館講座室 無料
同時開催
コレクション展特集展示
「二科につどった個性」「人を描く」
「堀浩哉から」



長谷川利行《白い背景の人物》1937年 府中市美術館
公開制作 石川卓磨「奇術の記述」
12月20日(土)→5月10日(日)

生粋の大阪人で、小出 檣重

西洋志向のモダニスト。

一筋縄で捉えきれない面白さ。

「新しい日本へ新しい花を発祥させるには根のない木を植えてはいけない」——東洋と西洋の文化的風土の違いを強く自覚し、そのうえで日本人としていかに油絵を描くべきかを追究した画家、小出檣重。大阪中心部の商家に生まれ、濃厚な庶民文化につつまれて育ちながら、洋行後は西洋の文化を骨肉化すべく、衣食住を洋風に改め、大正から昭和初期にかけてのモダンな都市文化を体現しました。日本女性の体型や肌質を美しく描く裸婦、きゅうりやカボチャといった野菜を妖しく描く静物といったように、西洋美術由来のテーマを、日本に暮らす私達



《京上静物》1928年
京都国立近代美術館

にとつて実感できるものに生まれ変わらせます。そして艶やかな発色、滑らかな絵肌、デフォルメと曲線を活かした伸びやかな造形を特徴とする、洗練された油彩画のスタイルを築き上げました。代表作が一堂に会する25年ぶりの回顧展で、その全貌に迫ります。

みどころ1
「裸婦の檣重、
檣重の裸婦」
——日本近代洋画史に輝く
裸婦の傑作が一堂に。



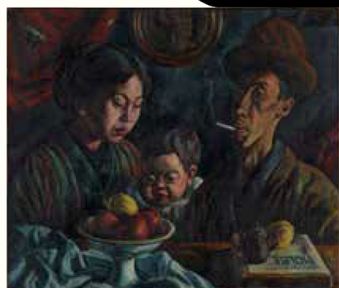
《前向き裸女》
1930年
横須賀美術館

「人間にとって他の何物よりも強き美しさを示すものは人間の裸身であろう。その色彩の複雑にして微妙である処、一ヶ所として「様な平面や線を持たない処、あらゆるデリーケートな凸凹において、線において、その立体において、そのかたさ、滑かさ、その軟かさ、その構成の整頓せる事において、さようなあらゆる点において。」（小出檣重、油絵新技法）

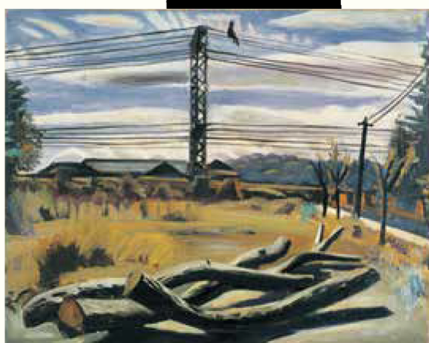


《朝子をかぶった自画像》1924年 石橋財団アーティゾン美術館

「今あらゆる新しきものを速かに吸収消化する能力こそ、若き日本人の生命であるともいえる。だが新しき日本へ新しき花を発祥させるには根のない木を植えてはいけない。一本の松は地下にどれだけ驚くべき根を拡げているかを調べてみるがいい。芸術はカフェーの店頭を飾るべき紙製の桜であつてはならない。」



《Nの家族》
1919年
公益財団法人
大原美術館
大原美術館
「重要文化財」



《枯木のある風景》1930年
公益財団法人ウッドワン美術館

新しき油絵

IN PURSUIT OF OIL PAINTING FOR THE JAPANESE

KOIDE NARASHIGE:

《街景》
1925年
大阪中之島美術館



みどころ3
ガラス絵、日本画、挿絵、
装幀、随筆
時代を映す多彩な創作。



《奈良を散歩する西洋人》1910年 前期展示



小出檣重著「檣重雑筆」
1927年
西宮氏コレクション



《道頓堀の夕陽》
1915年
株式会社紀陽銀行



《谷崎潤一郎『藝文』挿絵》
1928-29年
（前後期で自替）

みどころ2
大阪の「下手もの」愛好と、
モダンな都市文化の融合をみる。

